《授業と子ども》

ひらがなの授業(7)
― つまる音は　二つの文字で ―

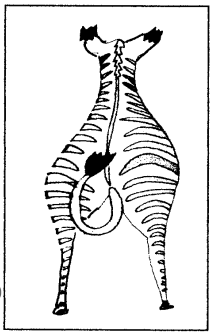
千葉　建夫

しっぽは　いくつの音なの？

これまで、「ア」という一つの音には「あ」という一つのひらがな文字をあてはめて書き表せるという、一音節一文字対応の表記のしかたを学習してきた。この原則だけでひらがなの表記ができればいいのだけれど、そうはいかない。一音節を二文字、あるいは三文字で書きあらわす場合があるからだ。一音節を二文字で書き表すものとして、促音（しっぽ・きって）、長音（すうじ・かあさん）、拗音（きゃべつ・おちゃ）があり、一音節を三文字で書くのが、拗長音（きゅうり・ぎゅうにゅう）である。これらの書き表し方は、音節のつくりがわかって、その音節の書き表し方のきまりを学ばなければ、何年生になっても正しく書き表すことはできない。

一音を二文字で書くという、一年生にとっての初めての学習は、促音から始めるのがいい。それは、促音をかな文字で書き表すときには、ちいさな「っ」をそえるという単純な原則ですべての促音表記ができるからだ。子どもたちには促音を「つまる音」と名づけて教えた。

四年生を担任したとき、ローマ字の授業で、促音の表記の学習をしたことがあった。子どもたちに上の絵（図①）を見せて、


図①

「キリンのおしりについているものは、なんですか。」と聞いた。「しっぽ」と返事が返ってきたので、「いくつの音ですか？」と聞いてみた。すると、三つの音と二つの音に意見が別れた。三つという考えの子は、「だって、シッポは、ひらがなで「しっぽ」と書くでしょう。だから、三つ」という。単語を音節にわけるという理解がないまま、文字を知った子どもは、頭のなかに音とともに「し」「つ」「ぽ」という文字が次々に浮かんできてしまうのだろう。だから文字が三つなら、そこから逆算して音節も三つと考えてしまうようだ。それに対して、文字の前に、音節分解の方法を学んだ子は、音を耳で聞いたり、口の動きを目で見ていたりして素直に二つの音ととらえることができるようだ。

単語を聞いて、この音節分解ができるかどうかが、これからの学習に影響してくることになる。「しっぽ」の「シッ」を発音するときは、口を動かすのは一回。だから、これを一つの音節と数える。口の動きは一回だけれど「シ」と発音する時間を一拍（♪）とすれば、「シッ」は、その2倍、2拍（♩）になる。これから学習する長音や拗音、拗長

音の音節と拍数の関係を統一的にまとめると下の表のようになる。（図②）

ローマ字では、「しっぽ」を「ｓｉｐｐｏ」、「きって」は「ｋｉｔｔｅ」と表記するきまりになっているが、子どものころ、ローマ字を教えてもらったとき、「し」は「ｓｉ」、「か」は、「ｋａ」と書くのに、どうして「っ」だけは、「ｐ」になったり「ｔ」になったりするのか、不思議でしかたがなかった。その意味がわかったのは、教師になってずっとあとのことだった。ローマ字の「ｐ」や「ｔ」は発音の記号であったのだ。「しっぽ」は「ｓｉ」と発音し、次の「ｐｏ」を発音する前にくちびるを閉じて、「ｐｏ」を発音する準備をする。そのときの口の形が子音ｐになっているというわけなのだ。

	音の種類	例	1音節の拍数	1音節をあらわす文字	例（記号）
短い音節	50音図の直音（まっすぐな音）	か・き・く・け・こ ざ・じ・ず・ぜ・ぞ	1拍	1字	つくし ●●●
	拗音（ねじれた音）	きゃ・きゅ・きょ ちゃ・ちゅ・ちょ	1拍	2字	きゃべつ ◠●●
長い音節	長音（母音を含む）（長い音）	かあ・さあ・たあ・なあ きい・しい・すう・とう	2拍	2字	かあさん ▬●●
	促音（つまる音）	かっ・さっ・たっ・まっ はっ・やっ・らっ・わっ	2拍	2字	かっぱ ●✓●
	拗長音（ねじれた長い音）	きゃあ・きゅう・きょう しゃあ・ぎゅう・ちょう	2拍	3字	ぎゅうにゅう ▬ ▬

図②

「にっぽんご5・発音とローマ字」の「指導ノート」によれば、促音について、次のようの説明をしている。

「つまる音は、母音のあと、無声子音（ｐ・ｔ・ｋ・ｓ・ｈ）のまえにのみあらわれる。つまる音は，母音をきゅうにとめて、しばらく（1拍分）そのままにしておく音である。つまる音は，それだけで発音することはできないから、まえの音節とあわせてながい1音節となる。たとえば、「ｋａｐｐａ」の「ｋａｐ」はｋａ（カの長音）とおなじように2拍相当のながい音節である。上の図式は、つまる音を発音するばあいの、とじる運動、とじた状態、ひらく（破裂する）連動を図式的にしめしたものである。」

kap〉—〈pa

促音をこのように理解することができて、私は初めて、促音を教材化し、授業を展開していく方向が見えたような気がした。

図③

つまる音は音をとめる

子どもたちは「てんぐとかっぱとかみなりどん」（加子里子・童心

社）の絵ばなし大好きだった。その中のかっぱの絵をとりだして、黒板にはった。（図③）

「あっ、はなをたらした子をさらっていく、かっぱだ」

「すみやきとうべえ、ちょっとまて―」

子どもたちはすぐ、かっぱのこわいろを使って、お話の世界にはいっていく。でも、きょうは促音の授業だ。

「ぬまのそばで、とうべえによびかけたのは、だれ？」

「カッパ」「カッパ」という子もいるが、「カパ」「カパ」という発音も聞こえてくる。「カッ」と「カ」の違いを意識しなければあいまいなままにすぎていきそうだ。

「これはね。『カパ』ではなく、『カッ、パ』と発音します」と発音してみせ、子どもたちにも意識的に発音させた。

「『カッパ』の下の音は、『パ』の音ですね。『パ』の音をとると、どんな音になりますか？」

「カッ、カッ、カッ、・・『カッ』の音」

「ちがう。『カツ』じゃない？」

二音で発音する子も出てきた。

「カッ」と「カツ」をゆっくり発音させ、比べさせてみた。

「あのね。『カツ』はね。『カ』と『ツ』の二つの音でしょう。でも、『カッ』は一つの音なんじゃない」

子どもたちはすぐに気がついたようだ。

次は、「カ」と「カッ」のちがいが問題になった。それで、「かば」の絵をだし、「かっぱ」と「かば」を比較し、「カ」と「カッ」のちがいを考えさせた。（図④）

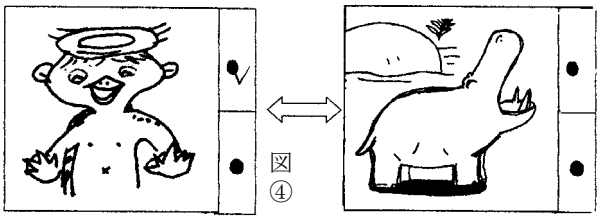
「『カッパ』の『カッ』はね。くちびるをとじるんだよ。ほら、こんなふうに」

そういって、やってみせる子もいる。

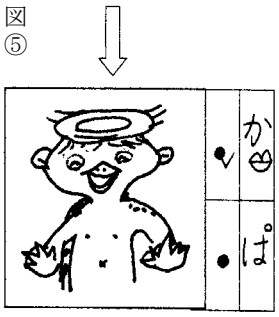
「『カッ』というのはね。『カ』といって、それからきゅうにくちびるをとじればいい」

「つづけてくちびるをとじると『カッ』なる」

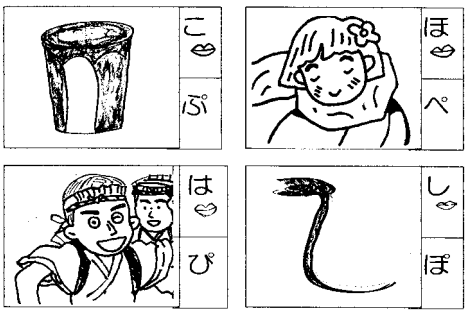
「よく、気がついたね。そうなんだよ、『カッ』という音は、『カ』の音をだして、そのあとにくちびるをきゅうにとじると生れる音なんだね。これをつまる音といいます」　そういって、「かっぱ」の絵の第一音節のマスに「√」の記号を書き入れた。その記号を見て、「カッパ」と発音してから、□の音のマスには「ぱ」の字を書いた。[√]のマスには、[か]の字を書き、そのわきにとじたくちびるの絵を書きいれた。（図⑤）そして、『カッ』と発音するには、「カ」より二倍の時間がかかることを確かめ合った。



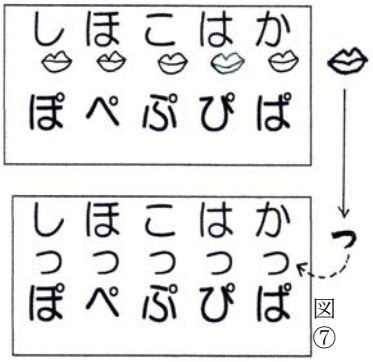
図④



図⑤



図⑥



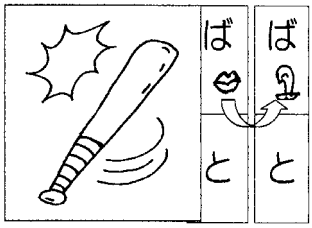
図⑦

次に、「はっぴ」「こっぷ」「ほっぺ」、「しっぽ」の絵を見せて発音しながら、その音に対応したかな文字をあてはめた。つまる音にはとじたくちびるの絵を書き入れた。（図⑥）

これらの単語をパ行の配列の順序に並べてみると、つまる音は「ぱぴぷぺぽ」の前にきれいに並んだ。

『ぱぴぷぺぽ』の前にならんだつまる音は、くちびるをとじて、音をとめますね。このとじたくちびるの絵のかわりに、小さな『っ』を書くことにするんだよ」

そういって、くちびるの図を「っ」に置き換え、促音の書き表し方の約束を教えた。（図⑦）



図⑧

舌のさきで　とめる音もある

つぎに野球のバットを見せた。

「これは何？」

「バットだ。ぼく、ホームランうったことあるよ」

バット、バットと発音しながら、「ばっと」が最初につまる音のある二つの音の単語であることを確かめた。それから、ひらがな文字をあてはめ、「かっぱ」の「かっ」と同じように「ば」のわきに、とじたくちびるの絵を書き入れた。（図⑦）

子どもたちがその絵を見て、バット、バットと発音していたが、そのうちに

『『バッ』『バッ』『バッ』・・・・。あれっ、なんだかおかしいよ。くちびるがとじないよ」

「くちびるをしめると、いいにくいよ」

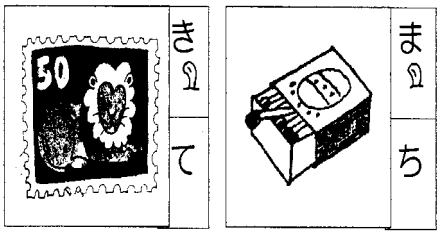
といい出した。そこで、

「バの音がつまるときに、どこでとめているんだろう？」

と聞いてみた。

『『バッ』『バッ』『バッ』・・・。くちびるは、開いてるよ。べろでとめてる」

「せんせい、くちびるの絵じゃなくて、べろの絵にしたらいい」



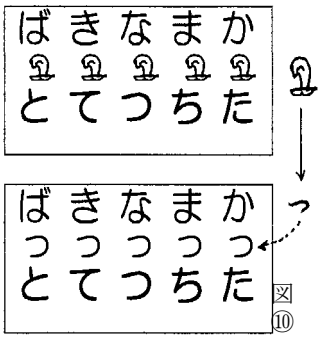
図⑨

子どもたちは気がついたようだ。

「そうか。『バット』の「バ」の音は、くちびるでとめていないんだね」

そういって、「バッ」の音は、舌のさきを、上の歯ぐきにつけてきゅうにとめて出すことを確かめあった。そして「ば」の字の下のくちびるの絵は、舌さきの絵と交換をした。

次に、「まっち」「きって」の絵を黒板にはった。（図⑨）

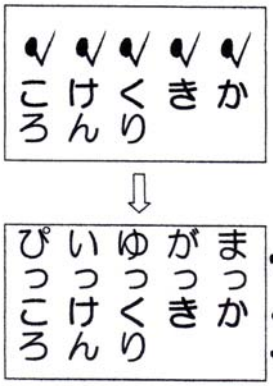


図⑩

「マッチ」「キッテ」と発音してみると、これも舌さきを使って音をとめている。

「たちつてと」の前にあらわれるつまる音を並べてみた。このときのつまる音は、舌先を上の歯ぐきにつけたり、近づけたりして、タ行の音の口のかまえで音をとめ（息をつめ）ている。そこで、タ行の前のつまる音の文字に舌さきの絵を書き入れた。それから、「このときの舌さきの絵も、くちびるの絵とおんなじに、小さな『っ』で書くことにしますね」といって促音の書き表し方は、「っ」でいいことを教えた。（図⑩）　子どもたちは「そうか。つまる音だから、小さな『っ』を書くんだね」と自分なりに納得しているようすだった。

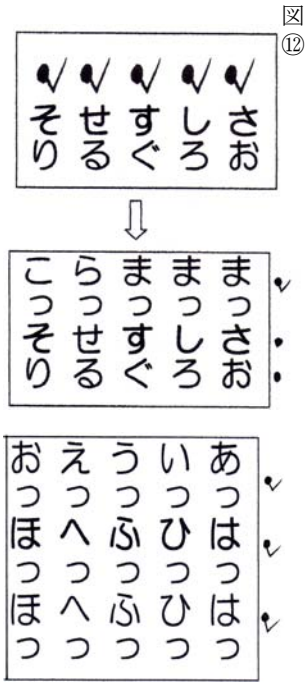
つまる音のとめかたは、いろいろ



図⑪

次に、図のようなカードでつまる音さがしをした。

カ行、サ行、ハ行の前にくる単語を並べてみた。**つまる音は、はじめの出した音をとめてつくる**、ということを理解できた子どもたちは、こんどは、これらの単語を発音しながら、つまる音が、どのように音をとめているのか考えるようになった。



図⑫

「『かきくけこ』のまえにくる音はね。のどの奥でとめるよ」（図⑪）

「『さしすせそ』のまえにくる音はね。歯と歯をあわせて、とめてるよ」（図⑫）

このようにして、子どもたちの観察から、**つまる音は、どの音もあとにくる音の口のかまえをして、音をとめているという**共通点が見えてきた。そして、つまる音のでき方は、いろいろあるけれど、みんな小さな「っ」で書き表すという日本語の約束をおぼえることができた。

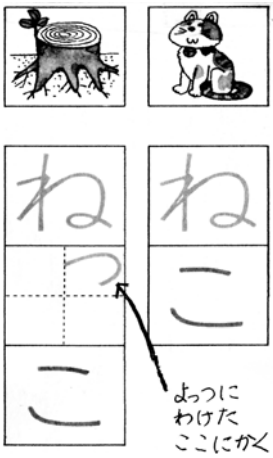
つまる音になるかならないかの一音ちがいで単語の意味がまったく違ってくるものがある。その仲間を探して、へんしんカードを作った。（図⑬）

名詞だけでなく、動詞もいれると「かた」と「かった」、「はた」と「はった」のようにいろいろ見つかってくる。子どもたちといっしょに探すのも楽しい。

図⑬

（「ひらがなあそび」・太郎次郎社より）

図⑭



つまる音をノートに書くときは、最初は、一音節であることを強調するために、一つのマスのなかに二文字を同居させていたけれど、あとで、次のマスに移して小さな「っ」を書く練習をするようにした。（図⑭）

五十音は、みんなつまる音になるの？

つまる音をひととおり学習し終わったら、子どもたちが「五十音の音はみんなつまる音になるのかな？」と聞いてきた。それで、五十音図を広げて、「つまる音」にして、読んでみた。

「あっ、いっ、うっ、えっ、おっ、かっ、きっ、くっ・・」おもしろい。どの音もつまる音になる。にごった音はどうだろう。

「がっ、ぎっ、げっ、ごっ、ざっ、じっ、ずっ・・・・・・」、これもつまる音ができる。全部調べてみたら、「ん」をのぞいて、五十音図のどの音もつまる音になった。

次にみんなでつまる音がはいっている単語探しをした。

「いっぱい、にっこり　おしっこ、こっそり、だっこ、こまった、ろけっと、とらっく、びすけっと・・・・・・・・。」どんどん探せた。黒板に書いたらいっぱいになった。

「らっぱ、かっぱ・・・・」といっていた子が、いつのまにか、「・・かっぱ、かっぱ、・・ぱっか　ぱっか、ぱっか」と歌いながら、馬のように教室を回り始めたので、「こんな歌があるんだよ」と「ことばあそびうた」を教えた。

歌っているうちにみんな、暗記してしまっていた。この歌をまねて、「ことばあそびうた」を作る子どもも出てきた。このあと、子どもたちは、つまる音のはいった文章をよみあったり、かるたを作ったりしながら、一音節を二文字で表す促音表記の約束を自分のものにしていくことができた。

かっぱかっぱらった
かっぱらっぱかっぱらった
とってちってた

かっぱなっぱかった
かっぱなっぱいっぱかった
かってきってくった

「ことばあそびうた」・谷川俊太郎